

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

北国の雪坊主もう寝につけよ 金子かほる

雪女の怖さは何となく解かるのだが、雪坊主は一つ目小僧でも一角獣でもなく、その容貌は定かではない。でも、この句の「もう寝につけよ」の優しい言葉から、粗暴ではあるが憎めないキャラクターの持ち主であることは解かる。雪がしんしん降る夜は、雪坊主の妖怪があなたの前に現れる。

旧姓の由来検索 紀元節 金田 知子

選択的夫婦別姓制度の論議の最中の一句。作者は旧姓というものの由来を検索したという。おそらく明治以降の戸籍制度まで遡って調べたことだろう。個人より「家」を大切にすることを明確にしたのは、明治政府。尤も、江戸時代も家中心で、その家の中心は男。各村で作られていた宗門人別改帳（今でいう戸籍原簿）には戸主の名のみ記され、妻や子が居ても人数だけで、その名は書かれなかった。姓が無いのだから旧姓も無かった。従って夫婦別姓問題も無かった。家族同姓の戸籍制度を作ったのは、紀元節を作った明治政府。そこへ帰結する。

椿落つ験を担いで遠まはり 金田 喜子

古い椿は椿女に化けるといわれている。街道を旅する者が突然姿を消したりするのは、その椿女の仕業。咲いたまま落ちる不気味な椿の花を拾ったら最後、椿の中に入り込んだ椿女があなたを殺す。金田さんが験を担いで遠回りしたのは正しかった。怖い句だ。

下むいて登る坂道すみれ草 北 好夫

黙々と坂道を登る。上を向いては登らない。一步一步確かめながら登り、その時に萼を見つけた作者。へ萼程な小さき人に生れたし 漱石——この萼の純粹さを作者も知っていたろう。きつと立ち止まり、ひざまずいて萼を眺めたと想像したい。

鳥雲に酔生夢死も大き夢 木山 有衣

酔生夢死は「虚しく生涯を終えること。まるで酒に酔い夢見心地のまま、いたずらに一生を終えること」を表わす言葉。この句では、そのような無意味な一生であっても、そこで見た夢はそれで大きな夢だったのではないかと詠む。雲に入る鳥を見送りながらの感慨か。

春雨を聴いてゐたのに気がつきぬ 久保田勝一

さつきまで春雨の音を聴いていた自分だったのに、雨

が止んでしまったら、もうそのことは忘れてしまった。暫くしてから、雨が降っていたことを思い出し、その時の自分も思い出し「そういえば聴いていたんだなあ」と。以上の複雑な話を一句にうまく納めている句だ。

春塵を洗ふ憂き世の雨滂沱 栗原 季星

塵もあれば黄砂もあり、春はいろいろのものを運んで来る。それをざんざ降りる雨が洗う。その雨を作者は「憂き世の雨」と言っている。憂き世は浮世であり、無常の世。その憂き世が身にしみる「雨滂沱」。遣る瀬無くその雨が春塵を洗う、その摂理が悲しくもある。

春愁や時は私を置きざりに 小坏あゆみ

なぜ春愁になったかの理由でなく、春愁になっている今の「私」を詠む。漠然とした愁いであるが故に、その解決には幾ばくの時を要する。「置きざりに」された時間こそが大切で、ぼんやりしていれば愁いはいずれ去る。斯く言う私も春愁いの真つ只中。

春光や不登校経し児笑みこぼす 小泉まり子

不登校でしばらく学校を休んでいた子が、また学校に通学できるようになった。春光もそれを喜んでいいる。笑みをこぼす子に幸あれ。人間に光あれ。

米寿まで生きてみるよと山笑ふ 幸喜美恵子

「閏」では年齢を問うていないので、作者がおいくつかわからない。「米寿まで生きてみる」から、あと十年ほどで米寿になるお年と憶測する。春の山からエールまで貰い、作者は米寿どころか卒寿を越えていくことは必至。俳句がそれを後押ししてくれるといい。

ひとひらのハートに見ゆる牡丹雪 小濱けえ子

今年の牡丹雪。ゆつくり降り、舞い上がったりもして、暫く雪見をされた方も多かつたろう。作者もその一人。牡丹雪のその一片がハート型に見えたという。吹雪でなかつたし、一片と一片が重なり合つたそれがハートの形に見えたのかもしれない。ハートに見えたのは作者の人徳によるものだろう。

上役の持ち歌知らで花むしる 小林ゆきお

宮仕えは、上司を立てないといけない。花の宴でも、上司の持ち歌を先に歌おうものなら、後のしつぺ返しが三倍になって返ってくる。なので、先に情報を入力して上司の十八番を聴いておくこと。「大阪しぐれ」や「見上げてごらん夜の星を」などは上司が一番最後に歌うべく用意しているので、それは絶対に部下は歌ってはならない。その分、上司より上手く歌おう。一目置かれます。

こつそりと埋づめしものや花の下 小林 玲

〈願はくは花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ 西行〉が思われた。ただし、「こつそり埋づめしもの」が何なのかは解らない。物質なのか、魂なのか。山本健吉は「花といえ、榮え、華やかさを象徴するが、同時に花は、もろさやいつわりや頼りなさ、あるいは不安の象徴でもあった」と、その著書にて花の解説をしている。作者にとつて「花」はどういう存在であり続けるのか。思わず掌を合わせたくなるような一句である。

春愁やつけてあるから聞くラジオ 佐藤 和子

春愁をラジオという身近な具象を通して詠んでいる。はつきりしない毎日を送っていて、ラジオも自分で点けた筈なのにそういうことすら忘れている。「つけてあるから聞くラジオ」の投げ遣りな暮らしぶりが、春愁の心のあり様を示している。これも時間が解決してくれることは前述の通りである。滑稽でありつつ春愁の本意を伝えていく。

晩学の行きつ戻りつ絵双六 島 昌子

羅針盤もなく晩学は始まる。その勢いが自分で制御できないので、この句のように行きつ戻りつしてなかなか目的のところへ到達しない。まるで絵双六のようだと思

者は苦笑する。絵双六は日本独自ののものでとても綺麗。

馬鹿だねえ幾つの春よお前さん 嶋谷 宗泰

事故で頭蓋骨折の大怪我をして入院されたそうですが、もう退院されたのでしょうか。今回の作品は入院中まだ回復されていない状態で詠まれたもので、病院食の句もあれば「亀一揆」の句もあつて作者の持ち味が十分に発揮されている。掲出句はお身内から嶋谷さんに投げ掛けられた言葉そのものを一句に仕立てたもの。「馬鹿だねえ：お前さん」に愛情が籠められている。

飛花落花靖国の鯉ふくふくと 首藤 久枝

東京での開花宣言は毎年靖国神社で行われ、今年もテレビ中継で開花の様子が放映された。その靖国の桜がよいよ「飛花落花」となり神社内の神池庭園にまで舞う。この池には新潟県から献納された特産の錦鯉が泳いでいるそうで、花びらを浴びて泳ぐその錦鯉たちを作者は「鯉ふくふく」と詠む。有りがたい鯉なのだ。

波菱草土を愛して歳重ね 正田 和子

波菱草を育ててきたからこそ的一句。「土を愛して歳重ね」に作者の深い自負が窺える。私は土いじりや畑仕事は全く経験がないので、掲出句には只々敬服するのみ。

蛇穴を出て濁り世にとぐる巻く 新海あぐり

「蛇穴を出づ」の句に「蛇穴を出て見れば周の天下なり 虚子」がある。時代の変化の中に蛇はいつも放り込まれるのだ。題詠でこの季語を詠むときの大半の方は、虚子の句と同様、昔とは異なった時代、場所へ蛇を送る。掲出句も、永い眠りから覚めた蛇が「濁り世」に出ってしまったという設定で詠まれているが、その蛇が濁り世だと察し、とぐろを巻くというのが面白い。梃子でも動かない蛇。かのトラUMP氏でもこれは動かさせまい。

永久の笑み花満開を逝き給ふ 杉淵真喜子

埼玉句会で「未来図」時代に長く部長を務めた山口みどりさんがこの三月末に急逝された。その追悼の一句。丁度桜が満開で、密葬には多くの埼玉句会の皆さんが参列された。「永久の笑み」に故人の在りし日を偲ぶ。

絵踏なき現世の絵踏ウクライナ 高橋 章子

信徒に絵踏をさせた時代。絵が踏めるか、踏めないか。そういう時代は疾うに終わったけれども、この句では「現世の絵踏」を問う。その絵踏とは何か。ロシアに屈服するか、しないか。一部領土を譲渡するか、しないか。侵略された方の国が停戦に向けて様々な条件を突きつけられている。これも絵踏か。条件を飲まなければ死者が増

えるだけという現実。という風に「現世の絵踏」を読んできたが、作者はもつと広く捉えていることと思われる。絵踏は当事者だけでなく、我々一人一人に向けられているという解釈もできる。読み手側がどう感じるか。

蒼天を映し群れ咲くいぬふぐり 高橋満利子

春先に咲く犬ふぐりの、あの青い色が好き。土手一杯に広がり群れ咲く犬ふぐりは圧巻である。ネモフィラよりは濃い青は、この句の通り蒼天の色に違いない。天恵の色ということもできる。群れ咲いて、誠に美しい。

ミニカーと言へどフェラーリ春の夢 高橋美智子

夢にフェラーリの車が出てきたのか。それも本物ではなく、ミニカーの格好をしたフェラーリ。どうして夢に現れたのか不思議であるが、「ミニカーと言へどフェラーリ」は面白い。そのフリーズだけで新鮮に感じる。

ママちやりへ春の空気を入れにけり 竹森 美喜

若いお母さんたちは元気だ。自転車の後ろに幼子に乗せてどこまでも走っていく。元気に走る分、タイヤの空気が早く抜けるので、空気入れて一生懸命空気を入れるのか。この句ではそれを「春の空気」と詠むが、それだけでタイヤがばんばんに膨れ上がる様子が見え、秀拔。

土木屋は橋見も楽し花見船 田中 京

土木建築士も花見船に乗ったのだらう。隅田川であれば多くの橋の下を抜けていくので、岸辺の桜も綺麗だが土木建築士にとってはその古い橋も興味深い。「橋見も楽し」はまことにその通りと思う。

にんげんにただげんげんのあるばかり 寺田 幸子

「にんげん」と「げんげん」の言葉遊びもある一句。れんげの花だけが一面に咲く原っぱに出て、一切の俗事を忘れ、れんげに魅せられている。その心持ちを「あるばかり」と静かに結んでいる辺りに詩情がある。ひらがな書きで、「にんげん」である読者に心ゆくまで「げんげん」を見せて、これも心憎い。

お八つにもきつとなる筈霜柱 長井 敦子

「お八つになる筈ないじゃない！」の反論もあろう。でも作者は霜柱が食べられると思っている。靴で踏まれる前の霜柱といったそれはそれは綺麗で、食べてみたいという気持ちは理解できる。甘系のものを食べた後の口直しに、霜柱を召し上がるのも一興かもしれない。

囃や題名のない音楽会 中嶋きよし

テレビで永い歴史を誇る番組「題名のない音楽会」を

句に持ち込んだ意欲作。鶯をはじめ春の鳥のさまざまな声が聞こえる山里は、まさしく題名のない音楽会である。耳を澄ましてその鳴き交う声を聴けば心も安らぐ。指揮者のいない自由な音楽会。

山笑ふいつでも行ける旅仕度 中村 敬子

旅をするに相応しい季節となり心浮かれる日々。旅仕度はいつでもOKと、その準備に余念がない。天気予報で出発日を確認し、もちろん旅行地の選択も抜かりはない。この句、「山笑ふ」が楽しい旅を保障してくれているように、明るくて結構。元氣だ。

ミモザに雨誰はばからぬ涙かな 中村 東子

「誰はばからぬ涙」は、このミモザの花かもしれない。ミモザのあの黄色の花がたくさん垂れているのはとても豪勢で、思わず立ち止まってしまうこともしばしば。そこに雨が降ると、中空から咲くミモザを伝わり滴り落ちる。これを作者は「誰はばからぬ涙」と感じたのだらう。上五の「ミモザに雨」の切り出し方に工夫がある。

啓蟄や庭の片隅盛り上がる 中村 幹子

「庭の片隅盛り上がる」から何が出てくるか。それを想像するのが読者のお楽しみ。冬眠していた地虫、蛇、

蜥蜴、蟾蜍、蚯蚓などなど。盛り上がって出てくるものは何だろう。〈啓蟄のつちくれ躍り掃かれけり 禪寺洞〉

唐櫃からうとの中は寒かる霰降る 野沢 慶子

唐櫃は棺のこと。この前の句に〈寒梅や骸となりて夫もどる〉がある。また、掉尾に〈行く春や手摺だらけの家となり〉が置かれている。霰が降る寒い一日。唐櫃の中の夫君を労る「寒かる」の言葉が切ない。

夜桜やドローンと化す我が身体 野村 雅美

夜桜見物の異色作品。いろいろの土地の夜桜を観たいけれども、それは叶わない。であれば、ということでは咄嗟に思いついたのがドローン。あのドローンが私であればと願ったら、身体がどんどん縮まりドローンに変身。そして、夜桜を存分に見て回る。これはミステリー・ゾーンの出来事かもしれない。作者は自在だ。

初めてのコーラのパンチ昭和の日 橋本かをる

昭和の時代、とりわけ敗戦後を象徴する出来事の一つ。初めてコーラを飲んだ時のあの泡の衝撃。作者はそれを「コーラのパンチ」と表現している。「パンチ」が的確。幼少の頃、浅草の家の近くにコカコーラの店が出来て、母はそこを「コッカさん」と呼んでいた。遠い昔である。

立春の窓のくもりを気にやみぬ 橋本 恭子

今年の節分は雪が降りとても寒かった。翌日が立春だったがこの日も曇りがちで寒かった。春は名のみ、この句ではその冬と春との狭間の空気を詠んでいる。立春というと明るい希望のある事柄を詠むことが多いが、この句のように、落ち着かない窓のくもりを詠むことも貴重。

猫柳そのきらめきを我がものと 長谷川菊男

猫柳の艶やかな光とその柔らかな感触。その猫柳に憧れる作者。「そのきらめきを我がものと」は、自分には足りない「きらめき」を猫柳から戴きたいという一縷の希望である。猫柳のきらめきのみに焦点が当てられ、省略も効いている句である。

散らかして三寒四温の服選ぶ 長谷部幸子

「散らかして」の措辞に、情景がぱつと広がる。着たり脱いだり着たり脱いだり、なかなか今日の服装が定まらない様子がよく見える。「散らかして」からは彩までも見え、明るく楽しい句になった。

樹々伐られ増ゆる宅地の初音かな 畠山 奈於

宅地造成により樹木がどんどん減っている中で、初音が聞こえて来る。寂しいけれども、その声に救われる。

抱き上げて花に触れさせ若き父 浜田 優子

花見の父子。その子を抱き上げ、桜の花に直接触れさせている。若き父だからこそその微笑ましい光景。私が若き父だった時は、肩車して葡萄房を鋏で剪らせてあげた。一回だけだったが思い出深い。この句の若い父もずっと覚えているだろう。但し、幼子はそのことを忘れていた。それでいいのだ。

ひとつ欠けふたつ欠けして雛調度 原田ミチ子

雛道具の店に行くと、牛車の車輪や鏡台などのパーツが売られている。「ひとつ欠けふたつ欠け」した調度品はここなら皆揃う。しかし、補充したいと思っても、あらたまって買い揃えるのは大変。結局この句のように欠け続ける。欠けるのは自然の摂理だが、寂しいこと。

鶴引くや空びん十本空見上げ 春田 千歳

「鶴帰る」と空瓶との取合せの句。空瓶とは突飛だが、その景を想像してみると大変面白く、斬新。空瓶が十本立っただけなのに、その空瓶の上を鶴が引いていつて絵になった。「見上げ」の擬人的な言葉にも無理がない。

こだま号抜かるるばかり山笑ふ 平野 美子

こだま号は各駅停車なので、他のひかり号などに抜か

れてしまうのは致し方ないこと。作者も「抜かるるばかり」と詠んでいる。この句では「山笑ふ」が上手い。名立たる山々の見える駅で停車している新幹線こだま号。その車窓へ春の山が「笑ふ」のだ。長閑な景。

虫出しの雷護送車の停車中 本多 遊子

虫出しの雷は、初雷。護送車が停車している最中に鳴ったという。信号待ちで停まっていたのだろうか、護送される人たちが一斉にその雷を聞く。啓蟄の頃の雷であるから、それを機に穴を出る生き物たちも居れば、護送され収監され穴倉へ入る人々も居る。その人間交差点がよく描かれている句である。

色即是空はなさいてすぐ花の雨 松本 直方

色すなわち空なり。「目に見えるもの、形づくられたものは、実体として存在せずに時々刻々と変化しているものであり、不変なる実体は存在しない」だとすれば、それは桜そのもの。咲いたばかりのところに花の雨が降る。「はなさいてすぐ花の雨」は、儚くも美しい言葉。

涅槃図の葉袋の紐揺れ通し 水谷 光子

涅槃図の沙羅双樹に引つ掛かっている赤い葉袋。摩耶夫人がお釈迦さまのために投じた不老薬の入った袋とい

う。涅槃会で作者は眼前の涅槃図に見入りながら、その葉袋を見つけたようだ。その葉袋は釈迦へ届くことなく樹に掛かったまま。葉袋の「揺れ通し」の措辞に、間に合わなかった無念さが滲み出ていると感じられた一句。

日だまりに木椅子三脚諸葛菜 持田きよえ

初学の頃、職場の裏の駐車場に群れ咲くむらさき色の花の名が解らず『カラー図説日本大歳時記』で調べたら諸葛菜という花だった。どこにでも咲く花で、掲出句にも出てくる。この句、諸葛菜を見ようと「日だまりに木椅子三脚」を置いている訳では決してない。木椅子の辺りに明るく咲いているだけの花。諸葛菜はそんな花だ。それにしても暖かな句である。

すずめより広く世界を知るつばめ 森尻 禮子

私好みで言わせて貰えば「つばめより広く世界を知るカモメ」である。カモメは世界中の港町を巡る。軒に固執する燕よりは、広く世界を知っているのではないか。とは言え、この句は魅力がある。雀は英語でスパロウ、燕はスワロウ。作者はそのことに気づき、このような素晴らしい句を作った。日本語の俳句だけでは勿体無い。願わくば、スパロウ・スワロウの韻を踏んだ英語俳句を作られんことを。

白梅や木の門のある 山田 徑子

外廁か、門が一本鎖してある。今は使用されていないのかもしれないが、白梅が楚々と咲き、長い歳月を感じさせる。派手さは無いが、この句の醸し出す静けさは大切にしたい。

花馬酔木不老の井戸の水涸れて 山田 雅子

不老の井戸と謂われてきた古い井戸もはや涸れ、時の流れを感じざるを得ない。この句の前後に水辺の句があるので、この井戸もどこか由緒のある庭園で見掛けられたのだろう。馬酔木の花だけがこの不老の井戸の歴史を知っている。

好かれたきや鳴けよ光れよ御器噺 横須賀智子

ごきぶりが囀ったとしても、玉虫のように光っても、好かれはしないだろう。でも「鳴けよ光れよ」と、ごきぶりを応援する作者。ごきぶりと目が合った時の、こちらを窺うようなごきぶりの静止は、人類が誕生して以来のもの。そう簡単にはごきぶりを卒業できないだろう。

文身の少年哀し春深し 和田 郁子

遊びのいれずみではなく、極道のいれずみと読んだ。悪の道に染まり捕まったのか、まだ少年だ。「少年哀し」

は作者の切実な思い。「少年哀し」「春深し」のリズムが良い分、少年を巡る情況、家庭を巡る情況は深刻だ。

料峭の小さく屈み生きものは 阿部 草薫

春寒料峭。春になつてもまだ耳が凍るくらい風が冷たい。人間もそうだし、生きものたちも只々屈むばかり。作者自身も小さく屈み、生きものの仲間になつてゐる。

クロワッサンぱふつと春の空気食む 伊澤やすゑ

「ぱふつと」の音の感触がいい。クロワッサンのあの空洞にはきつと春の空気が詰められているのだろう。ゆつくり割つた時にその空気が飛び出し、佳い香りとともに作者の口に「ぱふつ」と入る。春の到来を告げる、美味しそうな句である。

桜見る視力の限り只じつと 市村 啓子

桜に見惚れていたのを「視力の限り」と言つてゐる。その美しさに只見惚れていたのではなく、桜を通して、過去から現在までの様々なことや、亡き人のことなどを思い出してゐたことも察せられる。「只じつと」の目がそう語つてゐるように思える。

玻璃越しのひかりにとける子猫かな 牛込はる子

硝子窓を通して春の光が猫の子に差し込んでいる。猫の子は、此処に居れば暖かだということを知つていて動こうとしない。窓の光が差し込むうちに、丸まつている猫の子の体がとろけていくようで、作者はそれを「ひかりにとける」と表現している。眠くなるような句だ。

春光やゆきずりの児に手を振られ 内海 範子

散歩中の園児たちが、私のような老爺にも盛んに手を振つてくれることがある。誰だか解らないだろうに笑顔まで見せてくれる。有り難いことだ。この句の作者も同じような場面に出合い、手を振られた。「ゆきずりの児」という言葉が一期一会を表してゐて、良かった。

大海へ出づる本懐花筏 大下 壽櫻

「本懐」は、かねてからの願い。花筏が海に出ることは稀であろうから、この句の花筏は本懐を遂げた訳だ。「大海へ」のスケールの大きさ。作者の希望でもある。

ふつくらと煮上ぐる小豆雛の日 太田 裕子

三月のおひな祭。雛段の前で、雛に供えたもののお下がりを皆で会食する。会津の塩川町では、会津こづゆ、ちらし寿司、紅白の餅、煮魚、てんぷら饅頭、おはぎ。

長野には、お雛様に供えたものを食べると病気をしないとか、美人になるとかの言い伝えがある。掲出句では小豆を煮ている。「ふつくらと煮上ぐる」に、雛の日を祝う心持ちがよく出ている。

東京にしづかなる雨万愚節 大和田いそ子

愛媛から東京に出て来られた時の印象を綴っている。いつも人と物とでごった返している東京に雨が降った。東京の人間は気づかなかつたが、作者はその雨の降る東京の静かさに驚いたのだらう、「しづかなる雨」と記す。そして「万愚節」。嘘！と思つたに違いない。

唐突に「お幾つにい」と長閑なり 小河原政子

普通の会話の流れの中で「お幾つになられましたか？」と聞かれることはままある。作者も聞かれたのだが、相手の聞き方が唐突ながら「お幾つにい」とやや上品。これは確かに長閑。

春雷の遠くに近くに弔ふ夜 小野 直美

この句の前後に〈春の雨骨壺抱いて戻る家〉〈哀しみの臓腑照らすや春の月〉がある。お身内の弔い。哀しみの中、春雷の音が遠くに聞こえたり、近くに聞こえたり、さぞや身にしみたことだろう。

〈閨の仲間たち〉

虹よ

春田 千歳

クラリネットの拗ねたる音色春浅し

油頭のハンカチ母の忘れ物

日に三たび見上ぐる古巣帰り来よ

片足で立ちたる虹よ戦場よ

葉桜や蝶ネクタイの似合ふ街

夏遍路この世の土を踏み締めて

（「俳壇」令和7年5月号より転載）